

## 時

## 報

第 23 卷 第 6 號 昭和 12 年 6 月

## 防空法案に就て

最近頗る逼迫せる各國間の狀勢と今日の如き航空機の發達せる時代に於ては、いざ非常時と云ふ場合に如何に善處するかと云ふ事は非常に大きな問題である。此の意味に於て去る 4 月 5 日法律第 47 號を以て公布をみたる防空法は全文 22 條よりなり非常に重要性を有するものと信ずる。即ち今回の防空法に於ては從來行はれて居た防空演習だけでなく、防空に関する計畫を樹て、設備を整へ、既存施設をも改良し、各般に互りその防護を徹底せしむる等にある。

今その概要に就て略述すれば次の如くである。

第 1. 防空及防空計畫の内容を明かにし防空計畫設定者の義務に關する規定。

(1) 防空とは陸海軍の行ふ防衛に則して陸海軍以外の者の行ふ燈火管制、消防、防毒、避難及救護に關し必要なる監視、通信及警報を、防空計畫とは防空の實施及之に關し必要なる設備又は資料の整備に關する計畫を謂ふ。

(2) 防空計畫は原則として地方長官、又は地方長官の指定する市町村長、例外として防空上重要な地位に在る者をして設定せしむること。

(3) 防空計畫の設定者は防空を實施し、必要なる設備又は資料を整備し防空の訓練を行ふべきこと。

第 2. 防空上の必要に基き義務を命ずる範圍を明かにすると共に給與其の他に關する規定。

(1) 工場、事業場其の他特殊施設の管理者又は所有者は地方長官の命ずる所に従ひ必要なる設備若は資料を整備し、又は之を供用すべきこと。

(2) 醫師、藥劑師其の他特殊技能を有する者は地方長官の命ずる所に従ひ防穢、救護其の他防空の實施に従事すべきこと。

(3) 燈火管制を實施する場合に於ては光を發する設備又は裝置の管理者又は之に準ずべき者は其の光を秘匿すべきこと。

(4) 防空の實施に際し緊急の必要あるときは地方長官又は市町村長は他人の土地、家屋を一時使用し、物件を收用若は使用し又は防空の實施區域内に在る者に對し防空の實施の従事を命じ得る。

(5) 防空に關し調査の爲、必要あるときは主務大臣、地方長官又は市町村長は資料の提出を命じ又は官

吏吏員をして關係ある場所に立入り検査を爲さしむることを得る。

(6) (2), (3), (4) に依り防空の實施に従事する者之が爲、傷痍を受け、疾病に罹り、又は死亡したる場合は療養又は葬祭に要する費用を給すること。

(7) (4) に依り土地、家屋、物件に收用又は使用する場合は損失を補償すること。

(8) (2), (3) に依り防空の實施に従事する者には實費を辨償すること。

## 第 3. 防空の訓練に關する規定。

(1) 主務大臣は防空計畫の設定者に對し防空計畫の全部又は一部に基き防空の訓練を命ずること。

(2) 防空の訓練に際しては第 2 の (3), (4) と同様に訓練に従事し又之を秘匿すべきこと、但し光の秘匿の程度は訓練に適當なるものとする。

## 第 4. 費用の負擔及國庫補助に關し必要なる規定。

(1) 防空に關し必要なる費用は道府縣；市町村又は防空計畫を設定し若は特殊施設を管理、所有する者に於て負擔すること。

(2) 前項の費用に付ては 2 分の 1 以内の國庫補助をすること。

## 第 5. 其の他の必要なる事項に付次の如き規定。

(1) 防空委員會の組織及費用に關しては勅命を以て之を定むること。

(2) 防空上重大なる支障を生ずる行爲を處罰すること。

(3) 國に於て管理する施設に關する防空に付ては勅令の定むる所に依ること。

(4) 本法を朝鮮、臺灣、樺太に施行する場合に於て必要なる規定は勅令を以て定むること。

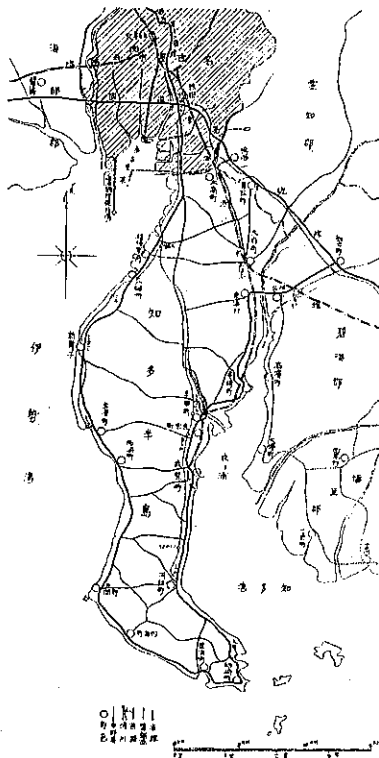
(5) 本法施行の時期は勅令を以て之を定むること。

(編輯部)

## 東西道路研究會聯合大會

昨年 5 月 16, 17 兩日を期して大阪市に於て開催せられたる第一回東西道路研究會聯合大會の効果を擧げたるに鑑み、去る 5 月 2, 3 兩日第 2 回東西道路研究會聯合大會を名古屋市に於て開催す。出席者 70 餘名にしてその主なる者次の如く、左記プログラムに依り盛會を極めた。

図-1. 東西道路研究会聯合大會見学箇所



参加者の主なる者 (順不同)

東京側	牧 彦七	今井 哲	堀 信一
	藤井 眞透	金森 誠之	西川 榮三
	山本 亨	大石 義郎	

の諸氏等 30 数名

關西側	福留 並喜	宮内 義則	富田 恵四郎
	近藤 泰夫	市川 良正	

の諸氏等 20 数名

主催者側	金古 久次	山口 十一郎	花井 又太郎
	長島 敏	北澤 忠男	

の諸氏等 20 数名

大會次第

2日. 午前8時名古屋驛前集合, 直ちに自動車を馳つて名古屋市内道路視察, 同9時太平洋平和博覽會場着, 同博覽會内參觀, 午前11時博覽會場出發途中市内通路を視察しつつ東山公園に向ふ, 正午同園内にて中食後植物園, 動物園見学, 午後3時より名古屋市役所會議室に於て同市主催の「名古屋の道路を語る座談會」を名古屋高工教授北澤忠男氏座長の下に開催, 午後7時より市内得月に於て兩研究会主催

懇親會開催。

3日. 午前9時半熱田神宮東門出發, 知多半島ドライブウェイ視察途中新舞子水族館視察, 舞子館にて中食の後, 午後1時新舞子出發知多半島の風光を賞美, 常滑にて名産陶器を, 野間大坊にて種々の國寶を參觀, 師崎, 半田町を経て午後5時名古屋市に歸着, 走行料程約 350 km に達す, 名賣グリルにて夕食, 午後6時半より朝日會館に於て大阪朝日新聞社主催にかゝる道路講演會に臨み散會, 講師と演題下の如く, 一般聴講者を加へて頗る盛會であつた。

1. 閉會の辭

大阪朝日新聞名古屋支社整理部長 下井 宏之氏

1. 名古屋市道路の現状と批判

内務省土木試験所長 工学博士 藤井 眞透氏

1. 道路美化の必要性

京都帝大教授 近藤 泰夫氏

1. 道路計畫の將來

名古屋土木部長 花井又太郎氏

1. 都市計畫と街路

元東京市土木局長 工学博士 牧 彦七氏

1. 閉會の辭

名古屋高工教授 北澤 忠男氏

(南保 賀)

都市計畫決定事項

(昭和12年4月中)

1. 市制施行: 4月10日より熱海市及び多賀村を廢し其の區域を以て熱海市を, 5月5日より釜石町を廢し其の區域を以て釜石市を置く, 之で全都市總數は143となる。

2. 市街地建築物法適用都市: 京都府福知山市(施行令第31條及施行規則第140條の2の規定により指定)。

3. 都市計畫法適用都市: 大分縣日田町, 同鶴崎町。

4. 都市計畫區域決定都市: 山口縣下松(下松町, 末武南村, 花岡村の區域), 新潟縣相川(相川町, 金泉村, 二見村の區域), 石川縣羽咋(羽咋町, 千里濱村の區域), 奈良縣八木(八木町, 耳成村の一部の區域), 同今井(今井町, 眞管村の一部の區域), 同畝傍(畝傍町, 鴨公村, 香久山村の一部の區域), 福島縣喜多方(喜多方町, 松山村の一部, 岩月村の一部, 關柴村の一部, 豊川村の一部の區域), 福井縣小濱(小濱町, 今富村, 國富村の區域)。

5. 計畫の決定：都市計畫街路：千葉縣松戸（3 路線，延長 1.39 km，事業費 150 000 円），靜岡縣熱海

圖-2. 山口都市計畫街路

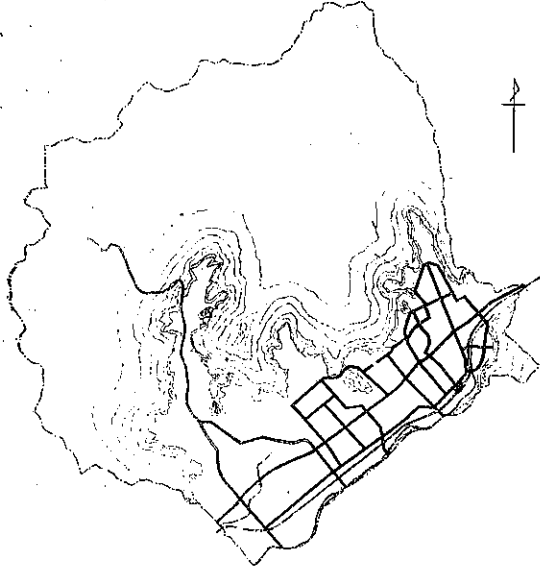
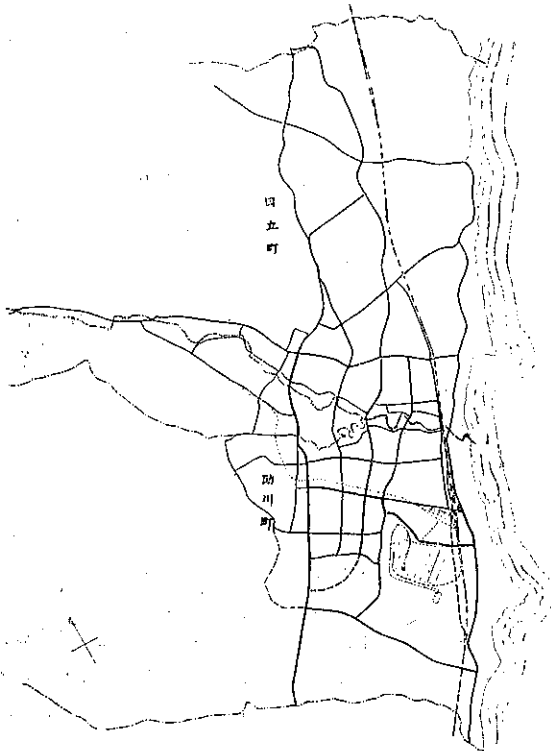


圖-3. 日立，助川都市計畫街路

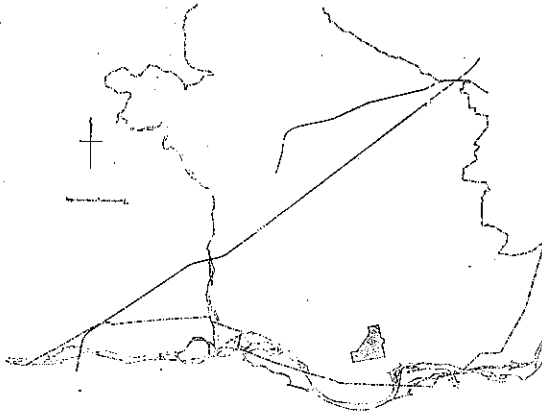


（2 路線，延長 2.07 km，事業費 523 000 円），山口縣山口（18 路線，延長 30.26 km，事業費 3 244 980 円），茨城縣助川（17 路線，延長 19.03 km，事業費 1 811 816 円），同日立（19 路線，延長 25.83 km，事業費 1 584 219 円）。都市計畫水路：富山縣富山（延長 1.00 km，事業費 30 000 円）。都市計畫下水：沖繩縣那覇（面積 130.51 ha，事業費 212 758 円）。都市計畫土地區劃整理：岡山縣倉敷（面積 2 35 ha，整理費 11 4000 円），三重縣尾鷲（面積 46.37 ha，整理費 1 35 760 円），同四日市（面積 0.28 ha，整理費 6 066 円），長崎縣佐世保（面積 33.6 ha，整理費 252 000 円），愛知縣名古屋（面積 101.49 ha，整理費 173 000 円），富山縣高岡（面積 34.9 ha，整理費 67 756 円），神奈川縣川崎（面積 501.01 ha，整理費 6 584 000 円），山口縣徳山（面積 58.53 ha，整理費 220 000 円）。都市計畫公園：靜岡縣清水（日本平公園，面積 34.9 ha，事業費 67 756 円），愛知縣刈谷（龜城公園，面積 79.3 ha，事業費 114 779 円）。都市計畫飛行場：長野縣長野飛行場（面積 25.0 ha，事業費 470 000 円），之は都市計畫として決められた初めてのものである。都市計畫風致地區：長野縣

信濃尻（野尻風致地區 740.0 ha，古間風致地區 252.0 ha），長崎縣千々石（千々石海岸風致地區 36.0 ha，猿葉山風致地區 21.4 ha，城山風致地區 34.5 ha，雲仙登山道沿線風致地區 24.5 ha），同加津佐（岩戸山風致地區 33.5 ha，女嶋山風致地區 44.5 ha），同小濱（富津辨天風致地區 82.5 ha，端町風致地區 120.0 ha，雲仙登山道沿線風致區 96.0 ha），同矢上（東望瀨風致地區 36.8 ha，瀧の觀音風致地區 108.0 ha），同島原（瓢箪畑風致地區 41.5 ha，森岳城址風致地區 10.5 ha），愛知縣刈谷（刈谷城址風致地區 20.67 ha），靜岡縣熱海（熱海風致地區 977.42 ha，伊豆山風致地區 742.60 ha，泉風致地區 591.51 ha），群馬縣高崎（觀音山風致地區 230.35 ha），福島縣郡山（中央風致地區 164.5 ha，開成山風致地區 53.1 ha，善坊池風致地區 60.0 ha），茨城縣土浦（龜城風致地區 3.27 ha，櫻川風致地區 49.28 ha）。都市計畫地域：山形縣酒田（住居 437 79 ha，商業 155.68 ha，工業 377.75 ha，未指定 35.81 ha），同米澤（住居 707.10 ha，商業 281.36 ha，工業 587.44 ha，未指定 294.16 ha）。

6. 事業の決定：都市計畫街路事業：三重縣津（2 路線，延長 0.311 km，事業費 185 000 円，昭和 12 年度，市長執行），福岡縣小倉（1 路線，延

図-4. 長野都市計畫飛行場



長 0.322 km, 事業費 379 000 円, 昭和 11~14 年度, 知事執行), 同八幡 (1 路線, 延長 0.414 km, 事業費 108 000 円, 昭和 11~13 年度, 同上), 同福岡 (1 路線, 延長 0.783 km, 事業費 267 000 円, 昭和 11~14 年度, 同上), 同大牟田 (1 路線, 延長 0.457 km, 事業費 100 000 円, 昭和 11~13 年度, 同上), 長野縣松本 (2 路線, 延長 0.545 km, 事業費 372.980 円, 昭和 12~14 年度, 市長執行), 三重縣四日市 (1 路線, 延長 0.159 km, 事業費 49 310 円, 昭和 12 年度, 市長執行), 愛知縣瀬戸 (1 路線, 延長 2.702 km, 事業費 285 000 円, 昭和 12~13 年度, 市長執行), 富山縣高岡 (1 路線, 延長 0.52 km, 事業費 50 000 円, 昭和 12 年度, 新湊町長執行)。都市計畫路面改良事業: 新潟縣新潟 (面積 48 803 m<sup>2</sup>, 事業費 205 926 円, 昭和 12 年度, 市長執行)。都市計畫水路事業: 富山縣富山 (延長 1.00 km, 事業費 30 000 円, 昭和 12 年度, 市長執行)。都市計畫土地區劃整理事業: 秋田縣秋田都市計畫土地區劃整理區域内 (面積 98.75 ha, 整理費 43 000 円, 秋田市施行, 4 箇年以内事業完了), 愛知縣名古屋都市計畫土地區劃整理 (驛前) 區域内 (面積 37.03 ha, 整理費 1 929 798 円, 名古屋市施行, 5 箇年以内事業完了), 三重縣四日市都市計畫土地區劃整理區域内 (面積 0.28 ha, 整理費 6 066 円, 四日市施行, 昭和 12 年度内)。都市計畫下水道事業: 沖繩縣那覇 (面積 130.91 ha, 事業費 212 758 円, 昭和 11~12 年度, 市長執行)。都市計畫公園事業: 群馬縣太田 (東山公園 32.1 ha, 西山公園 6.2 ha, 事業費 29 332 円, 昭和 11 年度, 市長執行), 静岡県清水 (日本平公園 2.8 ha, 事業費 36 000 円, 昭和 12~13 年度, 市長執行)。都市計畫飛行場事業: 長野縣長野飛行場 (面積 25.0 ha, 事業費 470 000

円, 昭和 12~13 年度, 市長執行)。

7. 土地區劃整理組合の設立: 大阪都市計畫區域内 山島 (面積 18.69 ha, 整理費 57 101 円), 北海道留萌都市計畫區域内留萌 (面積 293.23 ha, 整理費 164 000 円), 静岡県清水都市計畫區域内大正橋通 (面積 0.57 ha, 整理費 1 400 円), 東京都市計畫區域内梅島 (面積 19.27 ha, 整理費 21 235 円), 神奈川県湯河原都市計畫區域内門川 (面積 2.02 ha, 整理費 2 198 円)。

(編輯部)

### 國際住宅及都市計畫會議

本年 7 月 5 日より 13 日の間, Paris に於て國際住宅及都市計畫會議が開催される。之の會議は London の國際都市計畫, Frankfurt の國際住宅兩委員會の綜合せられたもので, 同時に Paris 市の中心に於て「近代技術展」を催し, 最近に於ける建築, 都市計畫, 交通運輸, 娛樂, 衛生施設及其の他近代文化を組立てる所の各種の技術に関する進歩の狀況を説明せんとしてゐる。

尙右會議に引続いて 2 班の Paris 市近郊の視察旅行が計畫されてゐる。一つは 6 月 23 日より 8 日~10 日に亘つて, Lyons, Marseills, Nice 及 Alpes 道路を視察するものであり, 他は約 2 週間に亘り一般都市及住宅計畫に関する各方面の視察を爲さんとするもので, その詳細は未だ決定されてゐない。

**國土及地方計畫** (London 國際都市住宅計畫聯盟) 地方計畫の實際に關しては最近著名なる進歩が各方面に見られて居り, 又或る國に於ては特に國土計畫の方面に關し重要なる發展を示してゐる。之等の各國の實際に就て各々其の報告が集められ, 農業, 住居, 商工業, 娛樂等に關する將來への大なる指示となるものと思はれる。

### 小住宅に於ける資金の問題

#### ” ” 經濟 ”

(Frankfurt a/M 國際住宅聯盟)

勤勞階級の住宅に就ては資金が主要な項目であつて, 収入の或る一定率を超へてはならぬ。建築費は資本に對する利子と同様, 大戰以來非常な高率を來してゐる。又之に平行して住宅の質的向上に起因する費用の増大をも考慮されねばならぬ。住宅費に關する之の間の釣合ひの問題は各國の研究より決定すべき問題である。

立体的及平面的開發(兩聯盟提出) 都市をより良き状態に改良し、その相互關係を円滑ならしめる目的に對して、計畫は2次元及3次元の2通りが考へられる。

・理論的方面よりすれば之の問題は、各種の目的に應ずるための空間と人々との關係を求むることに歸し、實際的方面よりすれば (i) 1-2階建の單家族用住居、(ii) 4階建の多數家族用の住居、(iii) 高層建築の3様が考へられる。之等の問題に於いて各國の意見を議するものである。本會議には會員内務技師櫻井英記君が出席する豫定である。

尙下記に各會長を記する。

G. L. Pepler

President of the International Federation for Housing and Town Planning.

St. Belford Row, London U. C. I.

Henri Sellier

Minister of Public Health.

President of the International Housing Association.

32, Quai des Célestins, Paris-4<sup>e</sup>.

(編輯部)

### 第9回改良講演會

鐵道省工務局改良課主催の改良講演會が鐵道協會に於て昭和12年5月11日より4日間に亘りて開催せられた。

講演者40名、出席者約250名の多きに上り本省並に全國各鐵道局の關係者は固より東京府或は遠く滿鉄、朝鮮及臺灣の各鐵道等の人も多數出席し非常な盛況であつた。

又講演終了後は各工事の實況を映畫によつて紹介し引続き東京附近の工事現場を視察した。

講演題目及講演者は次の如くである。

#### (1) 物理地下探査法

##### (a) 總 説

建設局計畫課技師 渡邊 貫

##### (b) 彈性波式

東京帝國大學地震研究所技師 那須 信治

##### (c) 電気抵抗式

官房研究所技師 萩村 龍城

#### (2) 彈性波地質試験報告 下改技師 有馬 宏

#### (3) 弘前驛連絡設備工事に就て

仙鉄技師 伊藤興四郎

(4) 神戸市街2線柱式フラットスラブの施工に就て 大改技師 笠谷 孝

(5) 名古屋驛切換工事に就て

名鉄技師 飯野延之助

(6) 名古屋驛前廣場に就て 名鉄技師 宮田 勇

(7) 新築堤上に急行列車を運轉せる賀績に就て 仙鉄技師 加藤 正人

(8) 名鉄式軌條取卸器に就て

名鉄技師 谷 舜

(9) 大湊連絡船就航に伴ふ下關驛關釜棧橋補強改築工事に就て

廣鉄技師 小松 政夫

(10) プレキャストコンクリート桁の

横取方法に就て 名鉄技師 辻 左京

(11) 改良工事用物品に就て 本省屬 平方 五郎

(12) コンクリートアーチ架設用鋼製

拱架の設計に就て 研究所員 箭内 守美

(13) 雪害対策に就て 新鉄技師 早野 松次

(14) 六號線架道橋新設工事に就て

名鉄技師 吉田 良吉

(15) 線路扛上工事に於ける橋臺改築の

一工法 門鉄技師 村上 志津夫

(16) 土の力学に就ての現勢

東京帝國大學教授 山口 昇

(17) 品川客車操車場計畫に就て

東改技師 小林 廣二

(18) 砂ジャッキに依る橋桁の低下に就て 名鉄技師 浦上 悦治

(19) 鈍端転轍器の設計に就て

研究所技師 鈴木 喜雄

(20) 擁壁及橋臺の一型式に就て

大改技師 佐和 恭一

(21) 曲線中の鋼鈹桁の設計に就て

研究所技師 清水 治長

(22) 最近の熔接橋梁に就て

研究所技師 稻葉 權兵衛

(23) 新宿青梅街道架道橋徑間擴張工事に就て

東改技師 梶田 功

(24) 分岐驛の配線に就て 本省技師 吉川 義太郎

(25) 分岐器配置法の研究 札鉄技師 山本 龍也

(26) 簡易操重車に依る鈹桁架設に就て

名鉄技師 成瀬 志朗

(27) 上越線第一魚野川橋梁徑間擴張工

- |                              |      |       |
|------------------------------|------|-------|
| 事                            | 東鉄技手 | 南田保太郎 |
| (28) 名古屋驛本屋並應舎建築工事に就て        | 名鉄技師 | 増田 誠一 |
| (29) 名古屋驛地下埋設物の處理に就て         | 名鉄技手 | 福田 義一 |
| (30) 隧道切換工事に就て               | 仙鉄技手 | 石川祐三郎 |
| (31) 五條川橋梁改築に就て              | 名鉄技手 | 加藤 巽  |
| (32) 軟弱地盤に於ける橋臺及橋脚補強工事       | 東鉄技手 | 伊藤小四郎 |
| (33) 信號扱所改築の一方法              | 大鉄技手 | 中野利國  |
| (34) 隧道修築工事中に於ける要點           | 札鉄技手 | 松山 清  |
| (35) 操業開始後に於ける小椽水陸連絡設備に就て    | 札鉄技手 | 紺谷 剛一 |
| (36) カーリターダの各種型式と我國に適する型式に就て | 本省技手 | 雜賀 武  |
| (37) 新鶴見に於けるカーリターダ性能試験に就て    | 東改技手 | 湯澤貞次  |
| (38) 大阪驛本屋基礎工事に就て            | 大改技手 | 土居 幸男 |

映 畫

- |               |        |
|---------------|--------|
| 物理地下探査法       | 約 15 分 |
| 新鶴見に於けるカーリターダ | 〃 50 分 |
| 大阪驛本屋基礎工事     | 〃 15 分 |
| 名古屋驛本屋及應舎建築工事 | 〃 10 分 |
| 名古屋驛切換工事      | 〃 15 分 |
| 砂ジャッキに依る橋桁の低下 | 〃 5 分  |
| 簡易操重車に依る飯桁架設  | 〃 15 分 |
| 名鉄式軌條取卸器      | 〃 15 分 |

以上の内容に就ては他日講演會記録として印刷せらるゝ筈である。(編輯部)

中華民國土木技術者視察團來朝

中華民國に於ける官民土木技術者より成る視察團一行7名(他に團員夫人1名)は本邦土木施設並に主なる工事視察の爲來朝した。本學會東亞部に於ては去る5月10日東京會館に於て歓迎會を開催した(會務報告欄参照)。

新井副會長の歓迎の辭に始まり、中華民國側代表汪胡楨氏又英語を以て挨拶され、團員と各委員の間には國境を越えた土木技術者としての胸襟を開いた會話が取交され、愉快な一夕を過した。

新井副會長の挨拶

圖-5. 歡迎會の狀況



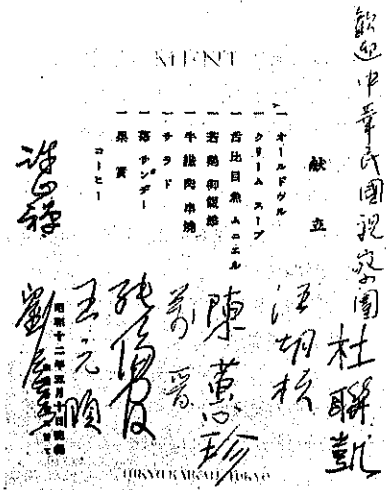
今回中華民國より土木の技術官が多數視察に來られましたので土木學會が今夕御一行を御招待申上げました次第であります。

今回御來朝の諸君は何れも水利に關係ある技術官で揚子江、黃河、並に北支那に於て夫れ夫れ重要な地位に居られる方々でかく多數の御一行を迎へますことは我々の非常に光榮と考へるところであります。

御一行は一月半に互つて我が國の治河、灌漑、水力發電等を視察せらるるそうですから我々は之等に關係のある工作物とか或は目下工事中のものでも時間の許す限り澤山を視察せらるゝ様御便宜を図る考へて居ります。只言葉が通じない點で御不便もあることと存じますが出来る丈の御接待は申上りたいと思つて居ります。

何うか御歸國になつた節は他の技術官にも御視察の模様を御照會になりまして今後もどしどし御視察に來らるゝ様希望して置きます。

圖-6. 團員諸氏の署名



今晚は料理萬端席次等甚だ不行届であります但御ゆつくりと御交歡せらるゝ様御願致します。

中華民國技術者視察團一行

全國經濟委員會水利處簡任技正 汪胡楨 同夫人
導准委員會技正 張倫官
劉老湖洩水壩工程局長 許止禪
江蘇省建設廳技正兼第一科々長 萬普
黃河水利委員會簡任技正 劉念茲
" 技正 杜聯凱
華北水利委員會技正 王元頃
江蘇導准八海工程處代理總工程師

本會よりの出席者は次の如くである。
大河戸會長，新井副會長，宮本，後藤，沼田の各理事，河西，小澤の兩常議員，那波，名井，眞田の各前會長，山田，別府，岡田，山中，正子，末森，松村の各東亞部委員，西田内務技師，鈴木大井川電力會社監査役，柴原書記長，小野寺庶務主任，糸川編輯主任

尙一行は丸ノ内ホテルに宿泊，次の様な行程を以て國內を視察する豫定である。

Table with columns: 月日, 視察, 夜間, 宿泊地. It lists the itinerary of the Chinese technical inspection team, including dates, activities like 'Hotel rest', 'dam inspections', and 'river visits', and locations such as Tokyo, Kyoto, and various provinces.

Table with columns: 日, 視察. It lists the inspection schedule, including dates from 28th to 10th and activities like 'Lake Sagami visit', 'Nagasaki city view', 'Osaka port', and 'Total Governor's office'.

Table with columns: 温泉, 宿根. It lists hot springs and accommodation locations, including Nagasaki, Yamaguchi, Kyoto, Osaka, and Tokyo.

(編輯部)

故古市博士英文略歴

本學會初代の會長古市公威博士は昭和 10 年 1 月 28 日逝去されたが本文は帝國學士院會員たりし博士の略傳を帝國學士院紀事第 11 卷より転載せるものである。

Kôji FURUICHI. (1854-1934)

Kôji Furuichi was born in Yedo (now Tokyo) on July 12th, 1854, the first son of Takashi Furuichi, a samurai of the former Himeji Clan.

From January 1869, he studied in the Government College (later Tokyo University) as a tribute scholar (excellent scholar sent from the feudal clans to the Department of Education) till July 1875, when he was sent to France. He studied at the Ecole Monge and the Ecole Centrale des Arts et Manufactures, Paris. He was graduated there in August 1879 with the degree of "Ingénieur des Arts et Manufactures". Further he studied at the Université de Paris, and obtained the degree of "Licencie es Sciences" in July of the following year.

In October of the same year, he returned home and served as an engineer in the Home Department, holding the additional post as a Lecturer at Tokyo University. When, in 1886, Tokyo

University and other institutions were amalgamated to the Imperial University, he became Professor and Dean of the College of Engineering in that University having additional duties as engineer in the Home Department, where he superintended the notable river improvement works of Shinanogawa, Aganogawa, and Shogawa.

In May 1888, the academic degree of Kogakuhakushi (Dr. of Eng.) was conferred upon him. In September 1890, he became a Member of the House of Peers, and since then Jurymen and Councillor of the Domestic Industrial Exposition, Member of the Earthquake Investigation Committee, River and Harbour Investigation Committee, adviser to Tokyo, Yokohama and other harbour works.

In November 1898, he was appointed Vice-Minister of the Department of Communications, Member of the Railway Nationalization Committee, and Chairman of the Investigation Committee for Construction of the Imperial Steel Factory, the solution of an important national problem. He then became President of the Imperial Railway Construction Bureau, and was elected Vice-President of the Imperial Railway Association, retaining the post till December 1903. In the same year, the honorary title of Emeritus Professor of Tokyo Imperial University was conferred on him.

On his resignation from the official posts, he became President of the Seoul-Fusan Railway Company, Korea. The speedy construction of this railway line gave great advantages in the operation of the Russo-Japanese War, 1904-5. On the transference of the Seoul-Fusan Railway Company to the Railway Bureau of the Korean Government in 1906, he was appointed President of the Bureau, remaining in the post till June 1907. Thence he was President of the Institute of Physical and Chemical Research and Chairman of the National Research Council.

In June 1906 he was elected member of the Imperial Academy, where later he was Chairman

of Section II.

In September, 1914, he was elected President of the Civil Engineering Society, Japan, when the Society was founded, and in January, 1933, an Honorary member of the same society.

For his distinguished engineering service for many years, he was made Baron in December 1919. In January 1924 he was appointed Privy Councillor, and remained in the post until his death of January 28th, 1934. He was also President of the Japan Engineering Society (Kogakukai) for many years till 1934. He always took lead in many engineering education problems throughout his life. When the meetings of the World Engineering Congress and World Power Conference were held in Tokyo, Oct--Nov. 1929, he was elected President. (編輯部)

### 故中山博士英文略歴

本学会前会長中山秀三郎博士は昭和11年11月19日に逝去されたが本文は帝國学士院会員たりし博士の略傳を帝國学士院紀事第13巻より転載せるものである。

Hidesaburo NAKAYAMA.

(1864-1936)

Hidesaburo Nakayama was born as a son of a samurai in Okudonomura, Nukada-gun, Mikawa Province (Aichi Prefecture), in 1864.

On finishing the civil engineering course in the Engineering College of Tokyo Imperial University in July, 1883, Nakayama was employed by the Kansai Railway Company as an engineer. Two years later, he was appointed Assistant Professor in the Engineering College of his alma mater in 1890.

In December, 1896, he was sent over to Europe and America for the study of river and sea engineering by the Government. Returned from abroad in November, 1899, he was promoted to Professor, and in the following year, he became an engineer of the Home Department. He was conferred with the degree of Kogakuhakushi (Dr. Eng.) in December, 1899.



Dr. Nakayama was appointed member of the Committee on the Investigation of Copper-Poisoning in 1902, Chief of the Operating Section of the Temporary Bureau of Hydro-electric Power Investigation in 1910 and Chief of the Hydro-electric Power Section of the Electricity Bureau in the Communications Department, member of the Temporary Committee on River Improvement, and a judging committee of the Peace Exhibition in 1922. In 1924, he was elected President of the Civil Engineering Society. In the same year, he was appointed member of the Imperial Economic Council and member of the National Research Council, and member and special member of the Temporary Committee on Yokohama Harbour Improvement in 1925.

In March, 1926, he resigned his professorship and in June the title of Professor Emeritus of Tokyo Imperial University was conferred upon him.

In 1928, he was elected Chairman of the Committee on Technical Terms of the Civil Engineering Society, and appointed member of the Temporary Committee on Electric Industries in 1929. He became member of the Civil Engineering Council in 1933. In 1934, he was appointed member of the Imperial Academy.

He served in the Engineering College of Tokyo Imperial University for thirty-six years, during which period he was several times in charge of the civil engineering section. He was enthusiastic in teaching, devoted all his life to building up the character of the students and guiding their thoughts. Among his students there have been a large number of noted scholars of distinct character.

He established a laboratory for river and sea engineering studies and directed research work of his pupils while he himself carried out various experiments and published valuable results.

He was first person in Japan to adopt the pneumatic caisson system for the work concerning facilities for land and sea connection at Yoko-

hama Harbour with great success, and contributed much to the present-day development of the system.

He planned the construction of Tokyo Harbour, making its personal surveys, and expressed valuable opinions on various important engineering works such as improvement of the river Saikawa, reclamation of Lake Shinai and the bridge construction across the Kinokawa. He gave good advice to the extension plan of Dairen Harbour. He also participated himself in the protective work against scouring, in investigating conditions of the river-mouth at Yingkow, in planning the improvement of Yokohama Harbour, in surveying and planning Suzaki Harbour of Kochi Prefecture, and in investigating the fishing ports in Japan.

A special mention should be made of his meritorious deeds in the first investigation of hydro-electric power sources; the prosperity of present hydro-electric power industries in Japan owes him so much. As a member of the Imperial Economic Council, he devoted himself to drafting the fundamental national policies, and as a special member for the traffic and electric power policies; he expressed a decisive opinion on the construction of Tokyo Harbour and the Tokyo-Yokohama canal, and on the control of hydro-electric power. Besides he gave valuable suggestions on the copper-poisoning question, the relative importance of various river improvement works, the afforestation against sand damages, and the control of electric industries. As the President of the Civil Engineering Society, which is much indebted to him for its remarkable growth, he contributed to the progress of civil engineering in Japan, and as the Chairman of Committee on Technical Terms of the said society, completed the standardization of technical terms of civil engineering.

He was ill for some time and passed away on November 19th, 1936, at the age of 73. (編輯部)